

ふるさとへの祈り

泊如竹
とまりじよちく

皆さんも、自分たちが住んでいる所の、地元のお祭りや行事に参加したことがあるでしょう。

昔の人々の優れた業績をたたえたり、歴史的な出来事を記念したり。そのいわれや目的はさまざまですが、今も鹿児島県内の各地では、このような催しが多々行われています。

鹿児島県の屋久島は、世界自然遺産の島として有名ですが、この屋久島の安房地区には、「如竹踊り」という、古くからの踊りが伝

【如竹踊りの様子】



【屋久島】



※ 15ページの長間川は安房川の支流の一つ。

【無形民俗文化財】

民俗芸能などの文化的遺産のこと。

えられています。県の※無形民俗文化財にも指定されているこの踊りは、その名前にもあるように、屋久島に生まれ育った「泊如竹」というお坊さんをしのんで作られた踊りです。

それでは、この泊如竹というお坊さんは、いったいどんな人物だったのでしょうか。また、如竹はなぜ、これほどまでに人々から、大切に思われているのでしょうか。

如竹は、室町時代の一五七〇年（元亀元年）に屋久島で生まれ、市兵衛と名付けられました。幼いころからとても賢かった如竹は、島にある本佛寺というお寺に五歳で入門し、ここで一八歳になるまで修行をします。そして、十八歳になった如竹は、さらに自分を

【関連年表】

- 一五七〇年 誕生
- 一五七五年 本佛寺に入る。
- 一五八七年 尼崎の本興寺に入る。
- 一五八八年 京都の本能寺に入る。
- 一六〇五年 鹿兒島の大龍寺に入る。
- 一六一三年 屋久島に戻り、本佛寺の住職となる。
- 一六二〇年 藤堂高虎（津藩）の顧問となる。
- 一六三二年 尚豊王（琉球国）の顧問となる。
- 一六四〇年 島津光久（薩摩藩）の顧問となる。
- 一六四七年 死去

高めていくために島を出ると、現在の京都市にある本能寺や鹿見島市の大龍寺など、様々なお寺の門を叩きました。

そうやって厳しい修行を積んだ如竹は、やがて諸国の大名家から、次々に顧問として招かれるまでになります。そうして招かれた先で如竹は、大名や琉球の国王に学問を教えたり、※為政者としての心構えを説いたりしました。

一八歳で屋久島を出てからも修行や学問に励み、各地を渡り歩いてきた如竹でしたが、自分の生まれ故郷である屋久島の人々のことは、いつも気にかけていました。修行の途中に島に立ち寄ることがあると、必ず村人たちに自分の蓄えたお金を分け与えました。

【為政者】

政治を行う人のこと。

【如竹翁の教え】（抜粋）

役所の仕事は一生懸命に努めましょう。

親孝行というのは物をあげることではなく、親が安心できるように自分が一生懸命暮らすことですよ。

他人は不幸でも構わない。私一人幸せであればと思うと、罰で自分が不幸になりますよ。

みんなが幸せであってほしいと思う心があれば、自分も幸せになれるのですよ。

また、よりよい生き方を自分たちの力でできるようになってほしいと、島の人々に、琉球から手紙を送ったこともあります。この手紙には、「夜更かしせず規則正しい生活をしましょう。」「一年の計画は春に立てます。秋の収穫を見越して、春にしつかりと種をまきましよう。」など、八か条の心がけがまとめられており、現在も屋久島の人々に受け継がれています。

一六四二年（寛永一九年）、七十八歳で屋久島に帰ってきた如竹は、人々が相変わらず苦しい生活をしていることに、心を痛めます。そして、

「屋久島の人々が幸せに暮らせるようにすること、それが、残され

お酒や昼寝はほどほどにしましょう。

一日の計画は前日に計画し、準備して仕事をしましょう。

琉球より 如竹

※ 本佛寺の茂木皓暢住職の解釈による。



【考えてみよう】

如竹の教えと、現在の自分とを、比べてみよう。

た人生の中で、私わたしがしなければならぬことだ。」
と決心したのでした。

如竹が住んだ屋久島の安房地区は、海に近く、井戸いどを掘ほっても塩しお水みずばかりで、飲み水を手に入れるのにも大変たいへん苦勞くろうしていました。人々は、毎日長い道のりを歩き、船で川を渡わたって水のあるところまで行き、おけに水を汲くんで運んでいたのです。

これを何とかしようと如竹は、用水路を作つくって、明星岳みょうじょうだけという山やまのふもとを流れる長間川ながまがわから水を引こうと考えました。決して簡かん単たんな工事こうじではなく、費用ひようぎんもたくさんかかるものでしたが、如竹は、自分が蓄たくわえたお金を使つかって人を雇やとって、硬かたい岩いわをくだき、土つちを掘ほり返かえしました。

それから約一年後、全長五八〇メートルにも及ぶ用水路は、ついに完成しました。勢いよく流れてくる水を見た人々は、とても喜び、この工事を進めてくれた如竹に心からお礼を言いました。そして、その感謝の思いを込めて、如竹のことを「屋久聖人」と呼ぶようになったのです。

この用水路は「如竹掘」と呼ばれ、本佛寺には、そのあとが今でも残されています。

また、この時代の屋久島の人々は、毎年決められた量の年貢を、大名である島津家に納めなければなりません。しかし、他の地域に比べて山が多く、田や畑を作って作物を育てることが難しく

【本佛寺に残る如竹掘の跡】



【年貢】
領主が課した税。

い屋久島では、思うように米などが収穫できず、人々は毎年の年貢にととても苦勞していました。そこで如竹は、屋久島の屋久杉を木材に加工することを提案します。加工品を年貢として納めたり、他の地域に売り出したりすることで、人々の生活を豊かにできないかと考えたのです。

しかし、屋久島の人々は、なかなか山に入って杉の木を切ろうとはしませんでした。山に勝手に立ち入ったり、木を切り倒したりすれば、神様からのたたりがあるのではないかと恐れていたのです。

如竹は悩みました。

「島の人々の暮らしを豊かにするために、この優れた屋久杉を利用しようとする考えは間違っていないはずだ。けれども、人々が怖が



【屋久島の森と屋久杉】

【話し合ってみよう】
杉を切ることをためらった人々の思いについて、話し合ってみよう。

る気持ちもよく分かる。人々が安心して山に入ることができるよう
に、何とか工夫くふうしなければならぬ。」

そこで如竹は、一人で山にこもり、山の神に祈いのることにしました。
実は一週間も祈り続け、ようやく山から下りてきた如竹は、人々に
このように伝えたと言われています。

「私は、屋久杉を切ることを許ゆるしてもらうために、この一週間、山
の神々に祈り続けてきました。すると、山の神から、このように告つ
げられました。『屋久杉を切りたいと思うならば、切ろうとする木
の前に斧おのを立てかけておきなさい。次の日、その木のところに行っ
てみて、立てかけた斧たおが倒れずにそのまま立っていたら、その木に
は神様は住んでいないから、安心して切っていいでしょう。』」



【資源保護と屋久杉】

現在げんざい、歴史ある貴重きちょう
な木である屋久杉を保護
するために、屋久杉を勝
手に切ることは禁止きんしされ
ている。

この如竹の言葉で、人々は安心して杉の木を切り、木材に加工することができるようになりました。屋久杉は、丈夫で腐りにくく、高級な木材として年貢で納められるだけでなく、京都・大阪など、全国各地にも送られ、屋根や廊下を作る材料として活用されるようになりました。

年老いて、自分の命がもう長くはないと感じていた如竹には、最後に気がかりなことがありました。それは、屋久島の人々にとって大切な交通手段である船が、高波で沈んでしまう事故が多いことでした。如竹は、

「私が死んだら、安房川の河口のあたりに墓を立ててほしい。私は

【加工された屋久杉】

木材に加工された杉は、平木二三一〇枚が、米一俵分の年貢にあたると言われている。



(屋久杉自然館蔵)

【考えてみよう】

如竹は、屋久島のことを、どう思っていたのだろう。

そこにいて、いつもみんなが安心して、安全に暮らすことができるように見守っているから。」

という遺言を残しました。

一六五五年（明暦元年）五月二十五日、如竹はふるさとの本佛寺で、静かに息を引き取ります。人々は如竹の遺言に従って、安房川の河口に近く、海がよく見える場所に、如竹を埋葬しました。如竹の墓は「如竹廟」と呼ばれ、その後も人々はお墓参りを欠かしませんでした。そして、如竹の死を悼むとともに、その功績をたたえて、旧暦の如竹の命日には、毎年「如竹踊り」という踊りを奉納することにしましたのです。如竹踊りは、それから三百五十年以上を経た今でも、地元の保存会によって大切に受け継がれています。



【如竹廟の入口】



【現在の
本佛寺】